



巻 頭 言

静岡赤十字病院院長

小 川 潤

本年も研究報編集委員会委員の熱意により静岡赤十字病院研究報41巻1号をお届けすることができました。編集委員の依頼に快く応えていただいた投稿者のみなさん、ありがとうございました。研究報については廃刊した方がいいなどの意見もあるようです。細川院長の時代から永年続けられてきた伝統を潰すことは簡単ですが、果たしてそれで我々に得られるものはなんでしょう。医療従事者たるもの、日々の臨床経験の積み重ねを何らかの形で振り返ることが求められているのではないのでしょうか。経験の整理によって過去を振り返り、来たるべき年度への課題や目標を定めることができる。目標のない仕事は退屈ですし、医療を労働と捉えることは虚しいでしょう。個人個人のかけがえのない経験を何より患者さんへフィードバックできないことは、医療者として無念と言えないでしょうか。忙しいから、の一言で研究報に協力できない言い訳にすることは簡単です。メリットがない、と物知り顔で語ることも同様です。自己の経験から言わせてもらおうと、そう主張する人から画期的な業績が生み出されることを見たことはありません。どんな形でもいいので、一つの文章を作り上げることは何より尊く、後世に名を残すこともできます。今回投稿が叶わなかった人たちも来年度は是非奮起して編集委員の依頼に応えてみてください。

さて本巻の内容を紹介します。原著が2編、血管外科医師と放射線技師から、症例報告が4編、初期研修医、医局、および看護部からそれぞれ出ています。嬉しいことに学会によっては本研究報の投稿が専門医資格の単位として認められています。研修医諸君が今後レフリー制度のある雑誌に投稿する前段階として本誌に投稿することは本誌の継続の理由付けになるでしょう。また特別寄稿として糖尿病で特集を組みました。本誌に投稿していただいた糖尿病内科、総合内科、形成外科、眼科はいずれも当院の誇るべき業績を残している科で、忙しいことは理由にならない好例です。糖尿病という多科に及ぶ重要な疾患を多面的に検討することは読者諸兄に益するところ大でありましょう。本年度は、自国開催が一生に一度あるかないかの夏季オリンピックが開かれた年でもあります。小西先生の医療担当ボランティアとしての参加報告はまたとない記念となることでしょう。昨年度から科紹介という企画が、また本年度から新外来紹介の企画が生まれました。雑誌としての多様性とボリュームを出そうという編集委員の心意気から生まれた発案です。

病院研究報を発刊していることは医療機能評価機構の評価項目に含まれています。つまり本誌は医療の質を担保するひとつの判断基準として常識的に扱われているのです。もちろんそれ以外にも前述したようにみなさんの日頃の仕事の成果として記念になるものです。歴史ある本誌を職場に持っていることをぜひ誇りに思ってください。皆さんもその歴史を担うお一人であることを自覚して来年度への目標としてください。